浦和大里小学校だより

１０月号　令和５年１０月２日発行

教育目標
夢と希望をもち、
人間性豊かで
心身ともに
たくましい子の育成

さあ、折り返し

校　長　　中 野　緑

雲一つない青空が、高く、高く、広がっています。大きく息を吸い込むと、体の中まで青空を取り込めたかのような、清々しい気分になります。

先日、学生時代によく通った喫茶店を、３０年ぶりに訪れました。たくさんの本に囲まれ、照明を落とした店内にボリュームを絞ったクラシックが流れる静かな喫茶店です。少し動作がゆっくりになった店主がドリップしたコーヒーを、そっと運んできました。「ここでよく待ち合わせをしたなあ」などと思い出しながら、近くの本屋で購入した本を片手にのんびりした時間を楽しみました。

思えば、かつては「待つ」ことは日常だったように思います。遠くに住む友達に出した手紙の返事を楽しみに待ち、まだ青い果実の熟成を待ち、時間通りに来ないバスをひたすら待っていました。

科学技術が大きく発展した現在、ただ「待つ」ことが日常からどんどん消えています。バス停の中には、今バスがどこを走っているのかわかるものもあります。スマートフォンを使えば、待ち合わせの相手が今どこにいて、どのくらい待てば会えるのかがすぐわかります。信号ですら、あとどれくらい待てばよいのか示されるものがあります。とても便利になりました。いつ終わるかわからない「待つ」が消え、効率的に時間を使えるようになったのです。そんな日常を送るうち、わたしは「待つ」ことが苦手になったと感じるようになりました。ゴールが見えない「待つ」状態にかすかな苛立ちを覚えてしまうのです。

一方で、子育ては効率的にはできません。息子は中学２年生の時に言いました。「ぼくは４年生まで、周りが何をやっているのか、よく分からなかったよ。」と。

なんということでしょう。ずいぶんマイペースな子どもとは思っていましたが、ここまでだったとは。思い返せば、「周りが何をやっているか分かった」４年生くらいから、確かに、ずいぶんしっかりしてきたように感じます。この取り組みをしたからすぐにできるようになる、とはいかないのが「人を育てる」難しさでもあります。子ども自身が「やりたい」「こうなりたい」という「意思」が出てくるのをひたすら「待つ」のが子育てなのかもしれません。

先日は、計画委員の児童と校長室で会食をしました。学校生活をより楽しく、より充実したものにするためのアイディアをたくさん出してくれました。担当の教員は４月当初から「どんな学校にしたいの」「あなたたちは何ができるの」という投げかけを続けてくれました。半年たった今、「こんなことをやりたい」というアイディアが各委員会で、各学年で、各クラスで、ミニイベントとなって出始めています。

育てるのではなく、育ちを「待つ」ことの大切さを、改めて深く心にとどめようと思います。

１年の折り返しとなりました。窓の外に目をやると、６月に真っ白い花をたくさん咲かせたヤマボウシが赤い実をたくさんつけて風に揺れています。

◆学校ホームページ内において子どもたちの日常を発信しています。「学校生活」をぜひご覧ください。◆